





## 内容紹介

陸上自衛隊中央即応集団は極秘任務を遂行する「影の部隊」の集合体で、福島原発事故では原発対処の主力だった。そのひとつ、中央即応連隊に東電社員救出の命が下った。重なる建屋爆発で現場の放射線量は膨大だった。3号機爆発に遭遇した中央特殊武器防護隊の隊員は負傷し、被曝した。爆発の危険を「東電は知っていたのではないか」。第1空挺団は飯舘村の住民救出に備えた。迫る最悪事を前に、放射能と対峙する「影の部隊」の壮絶な姿を多くの証言とともに再現する。

## 初出

朝日新聞 二〇一三年一月二十二日～二月十一日

## 目 次

[第1章 原発突入、極秘の救出作戦](#)

[第2章 重装備+紙おむつ](#)

[第3章 見せず、聞かせず](#)

[第4章 妻にも言えない](#)

[第5章 敵を包囲するように](#)

[第6章 うわっ、これは高い](#)

[第7章 車ごと吹き飛ばされ](#)

[第8章 どうなんですか！](#)

[第9章 踏みとどまってくれ](#)

[第10章 犬や猫にあげよう](#)

[第11章 ブロなんだから撃て](#)

[第12章 代わってもいいのか](#)

[第13章 行けと言って下さい](#)

[第14章 俺が見てくる](#)

[第15章 住民は普段着のまま](#)

[第16章 防護服やめましょう](#)

[第17章 特攻もあるのか](#)

[第18章 任務続行か、中断か](#)

[第19章 サリン以来の発令](#)

[第20章 携帯電話一覧表だけ](#)

[第21章 吉田所長は泣いた](#)

## 第1章 原発突入、極秘の救出作戦

自衛隊には表に出ない「影の部隊」がある。その一つが中央即応連隊だ。

国連の平和維持活動では真っ先に現地に入り、宿営や警備の態勢を整える。万が一に備え、厳しい訓練を重ねている。

原発事故直後、「影の部隊」が動いた。

2011年3月19日午後9時、福島県の郡山駐屯地。陸上自衛隊中央即応連隊長の1佐、山口和則（やまぐちかずのり）（48）が席に戻ると、机の上に防衛省陸上幕僚監部からの電話メモがあった。

「用件有、連絡下さい」

この日、福島第一原発では東京消防庁のハイパーレスキューが3号機に連続放水をしていた。

山口は原発がらみに違いないと思った。水は入りだしたから、それ以上の任務だろう。

陸幕監部に電話すると、こういわれた。

「原発で最悪の事態が起きた場合の作戦を検討している。取り残された東京電力社員たちを救出する」

東電社員救出作戦——。おそらく膨大な放射線量の中に突っ込んでいかなければならない。思わず「安全なんですか」と尋ねた。返事は「……だと思う」。

電話を切る際「作戦は秘匿しろ」といわれた。

秘匿の理由は、作戦が知られると国民に動揺や臆測を呼ぶと考えたからだ。今も公にはされていない。

作戦の内容を複数の防衛省幹部に取材した。徐々に輪郭が明らかとなった。

中央即応連隊は700人態勢で2008年に編成された。本拠地は栃木県の宇都宮駐屯地。装甲車や迫撃砲を持つ歩兵の普通科など4個中隊からなる。

山口らが郡山に出動したのは電話が入る2日前、3月17日だった。20～30キロ圏の住民避難を支援したが、これだけで任務が終わるはずがないと思っていた。

電話直後の19日深夜、全国から装輪装甲車が郡山に集まり始めた。

装輪装甲車は8輪の強化タイヤを持ち、パンクしても走行できる。最速100キロで隊員輸送に使われる。

原発敷地内がどんな状態でも突入し、数十人を助け出す作戦になる。特別な改造が必要となった。



救出者は、急を要するため屋根に乗せる。素早く乗れるよう、前部に踏み台、屋根に手すりをつける。ロープを2本おろし、50センチごとに結び目をつくる。

救助に来たことを知らせる拡声機も必要だ。操縦席は放射線を遮蔽（しゃへい）するための防護シートで覆う。

20日午前0時、正式命令が下った。内容は炊き出しや通信支援、行方不明者搜索、それと「関係機関等の所要に応じた各種支援」。

最後の「各種支援」が救出作戦を指した。隊員にどう説明するか。山口は食事がのどを通らなかった。午前8時、宿営する演習場で220人の隊員に告げた。

「不測事態における東電社員救出作戦を最大の焦点に任務を遂行する。危機を恐れず、侮るな」

雪解けの地面に立った隊員たちは無言だ。

山口は、作戦の口外を禁じ、こういった。「長期になる。今日は風呂に入れ。明日以降に備えよ」

## 第2章 重装備＋紙おむつ

3月20日夜、東京電力社員救出という極秘作戦に備え、陸上自衛隊中央即応連隊の行動が始まった。

郡山の駐屯地を出て、70キロ南東の海岸近くに移る。目的地は「福島県いわき海浜自然の家」。

小中学校が林間学校で使う宿泊施設だ。広場や体育館、炊飯場が整っている。標高60メートルの高台にあり、人目につかない。極秘作戦にぴったりだった。

午後9時半、連隊長の山口和則が作戦会議を開いた。研修室に中隊長や課長ら30人が集まった。

山口はホワイトボードに絵を描きながら、作戦の概要を説明する。

自然の家から10キロ北にあるスポーツ施設、Jヴィレッジに移り、足場とする。そこから20キロ北の福島第一原発まで装輪装甲車で往復する。乗せ帰った救助者と装甲車はJヴィレッジで除染する――。

25日までに、担当に分かれて準備するよう指示した。

作戦は徐々に具体化された。

原発への経路は、できるだけ高速道路を使う。不通に備え、農道をふくむ複数の経路を偵察した。

救出方法は、建物内に取り残された社員たちに装輪装甲車の拡声機で呼びかけ、急いで屋根に乗ってもらう。装甲車の改造を急いだ。

訓練は21日朝から始めた。

隊員は、防護服の上に重さ20キロの鉛のベストを着る。それに防護マスク。第1ヘリコプター団がヘリ放水したときと同じ重装備だ。

それに加え、全員が紙おむつをはいた。

出動して救出、除染するまで、少なくとも5時間はかかる。助け出す人数が多いと、休みなく出動を繰り返すことになる。いちいち鉛のベストと防護服を脱いでいる余裕はない。

装甲車の操縦手で2曹の斎藤孝行（さいとうたかゆき）（36）は待機部屋の畳の隅で、立ったまま大も小もやってみた。水分を控え、食事減らすことにした。





装甲車に乗るのは操縦手と車長の2人に絞った。

通常はハッチから顔を出して操縦するが、ハッチは完全に閉める。潜望鏡だけを頼りに運転する。

操縦席にはバックミラー大の潜望鏡が三つ。死角だらけだ。後ろの車長席には六つの潜望鏡があり、車内無線で車長がサポートする。

防護シートで覆った席は狭く、身動きが取れない。防護マスクで顔は汗まみれになった。息苦しい。

熱と閉塞（へいそく）感で吐いた隊員もいた。

### 第3章 見せず、聞かせず

「影」の部隊、陸上自衛隊中央即応連隊による東電社員救出作戦。極秘作戦だけに、訓練でさえ誰にも見られてはならなかった。

当の東電にも作戦は秘匿された。陸幕長の火箱芳文（ひばこよしふみ）（61）は「東電側にはわれわれと連携する余裕はないはずだった。作戦が広まると動揺を招く懸念もあった」と明かす。

3月21日以降、防護マスクや鉛のベストを素早く着る訓練を繰り返した。ハッチを閉めて装輪装甲車を操縦する訓練をし、東電社員に見立てた隊員が装甲車の屋根へ素早く上れるかどうかチェックした。

装甲車に取り付けた拡声機から、救い出す東電社員に呼びかける訓練もした。文言はこうだ。

「助けに来ましたので、速やかに車両の屋根に乗ってください。落ち着いてください」

聞かれてはいけない。人の目に触れてもいけない。最初は自然の家近くの工業団地でこっそりやった。住民に見られたため、場所を変えた。福島第一原発から20～30キロ圏の運動場や町営の駐車場を転々とした。

26日午前9時半。原発構内へ足を延ばす訓練を初めて行った。

訓練とは伏せたまま、第一原発までの誘導を東電社員に頼んだ。

目的は経路偵察、とだけ伝えた。

ネックは装輪装甲車だった。本番では8台が1列になって突き進むことになっている。だが8輪の強化タイヤを持つ装輪装甲車が8台も連なると、いかにも目立つ。

「色々な状況が想定されるので、色々な車で行かせてほしい」

そう伝え、4輪の軽装甲車などの列に1台だけ装輪装甲車を紛れ込ませた。それには連隊長の山口和則が乗った。車列は、骨組みがむき出しとなった建屋の脇まで行った。

週に1度は、緊急呼集から救助までの通し訓練をした。

第1中隊長で3佐の菊池敦（きくちあつし）（37）は、原発に駆けつけたとき、東電社員が倒れている姿が頭に浮かんた。担ごうと飛び出た隊員も倒れるんだろうな……。死を覚悟した。

家族の不安を和らげようと、広報班の1曹、町田康行（まちだやすゆき）（41）は号外新聞を作った。もちろん本来の任務は明かせない。

作戦決定後、初の号外は3月29日号。訓練のまっただ中だったが、避難所の住民を入浴できるホテルにバス輸送したことだけを伝えている。

「笑顔を運ぶ支援」。大見出しとともに、手を振る少女の笑顔が写真で大きく載っていた。



## 第4章 妻にも言えない

陸上自衛隊中央即応連隊に東電社員救出作戦の命令が下って1週間後の3月27日。作戦にかかわる隊員50人は、郡山駐屯地に向かい講義を受けた。

講師は関東補給処の化学部長で2佐の中村勝美（なかむらかつみ）（53）が務めた。

放射能に関しては、隊員全員が素人だ。「メルtdownって何ですか」という質問も出た。

聞き逃すと身の危険に直結する。全員が真剣にメモを取った。

装甲車につけた防護シートでどれぐらい放射線を防げるか。

「2、3割ですね」との答えに、空気が重くなった。

1時間の予定だったが、質問が相次いで30分延びた。

装輪装甲車で原発敷地内に突入する車長と操縦手の選考は、現場に任された。原発建屋に放水した第1ヘリコプター団と同じだ。

8台に16人。連隊長と中隊長を除いた14人を選ばねばならない。

第1中隊長の菊池敦は作戦室にこもり、約60人の隊員リストを見ながら考えた。独身者やこれから子どもをつくる隊員はなるべく外そう。でも若い隊員ばかりだ。意向は聞かず、理由も言わず14人を指名した。

外れた隊員たちは訓練で、操縦手が防護服を着るのを手伝ったり、車両の点検をしたりした。装甲車1台につき2、3人がバックアップ役として動いた。

潜望鏡での運転は死角だらけだ。そんな装甲車で、全く状況が分からない突発事態下の原発に突入しなければならない。必然的に、操縦手は経験豊富な隊員となった。

7千キロの操縦経験がある2曹の鈴木康文（すずきやすふみ）（30）もその一人だ。

鈴木は3月11日、宇都宮駐屯地で70キロのバーベルを上げるベンチプレスをしていたときに地震が起きた。

待機命令で帰れない。夜になり、妻、みね子（30）に電話した。

「披露宴、キャンセルしといて」

10年、結婚したが、披露宴はまだだった。その日どりが21日に迫っていた。

みね子が思わず「え？ 10日後なら大丈夫じゃないの？」「ふざけんなよ！」といい返した。

横浜市のホテルで開く予定で、親類や上官ら60人に招待状を出していた。鈴木がビールサーバーを背負い、みね子がつまみを手にして席を回ることも決めていた。

訓練中、みね子にも作戦は言えない。夕食後に「メシ食ったよ」などとメールした。



## 第5章 敵を包囲するように

2011年3月11日に戻ろう。午後7時半、防衛相の北沢俊美（きたざわとしみ）は自衛隊に原子力災害派遣命令を出した。

まず東北方面総監の指揮で地元福島や北関東、信越の部隊が動いた。それが変化したのは14日の午前11時5分。原発対処は陸上自衛隊中央即応集団（CRF）に一元化された。

CRFこそ「影の部隊」の集合体だ。東電社員救出作戦を進めた中央即応連隊はその一つにすぎない。突発事態への装備と能力を持つ主な部隊が5個あり、総勢は約4千人。

司令官で陸将の宮島俊信（みやじまとしのぶ）（59）は各部隊に次々と命令を下した。





中央即応連隊に東電社員救出の極秘命令を出す一方、緊急時の住民救出は第1空挺（くうてい）団に命じた。千葉県習志野駐屯地に本拠を置く日本でただ一つの落下傘部隊だ。

中央即応連隊が宿営したのは福島第一原発の南30キロ。第1空挺団は原発30キロライン上に位置する北、西、南の3カ所に分散した。

核・生物・化学テロ対処が専門の中央特殊武器防護隊は、一足先に動いていた。拠点にしたのは福島第一原発が立地する大熊町だ。

この隊は1995年の地下鉄サリン事件や99年の東海村臨界事故にも出動した。防護服やマスクを使い慣れていて、放射線の知識もある。

第1ヘリコプター団は仙台に配置され、原発への放水のほか、救援物資や被災者の輸送をした。

C R Fに所属する「影の部隊」がまるで敵軍を包囲するかのように第一原発を囲む構図となった。

C R F傘下には、ほかにテロ専門の特殊作戦群という最も機密性の高い部隊がある。この精鋭300人は出動せず、他の有事に備えた。

C R Fを出動させたのは自衛隊トップの統合幕僚長、折木良一（おりきりょういち）（62）だった。危機が深まる原発の状況を見ながら、折木は思った。「これはもう、自衛隊が出ざるを得ない。被災地支援とは指揮を分けよう」

決断の直接のきっかけは3号機爆発だ。爆発時刻は14日の午前11時1分。原発対処の指揮を東北総監からC R Fに替えたのは4分後だった。

ちょうどそのころ、東京都練馬区の朝霞駐屯地にあるC R F司令部に緊急報告が入る。

「隊員が巻き込まれた模様。連絡が取れない！」

3号機には、中央特殊武器防護隊が給水支援に向かっていた。

隊長の1佐、岩熊真司（いわくましんじ）（51）ら6人が行方不明と伝わった。宮島は「死ぬなよ」と念じた。

## 第6章 うわっ、これは高い

3月14日の3号機爆発で、中央特殊武器防護隊の隊長、岩熊真司ら6人が消息を絶った。

原発の南西5キロ、政府の原子力災害現地対策本部が置かれたオフサイトセンターにも爆発音が響き、キノコ雲が見えた。



近くで除染設備の据え付け作業をしていた２佐の菱沼和則（ひしぬまかずのり）（５４）は、岩熊との無線が途絶えたことを部下から聞く。

岩熊たちが爆発に巻き込まれた、と直感した。菱沼はオフサイトセンターまで走った。

建物の出入り口は、放射線を防ぐために閉鎖されている。菱沼は中に向かって叫んだ。

「隊長との無線が切れた！」

やがて自衛隊員が現れ、扉のガラス越しに紙を示した。「第二原発の病院に行け」とあった。けがをしたのなら病院に行け、という意味だ。

そのとき、背後で声がした。

「俺はここにいるぞ」

隊長の岩熊がいた。ほかの５人も一緒だった。

爆発から約４０分たっていた。

全員が、防護服に土ぼこりをかぶっている。足を引きずっている隊員もいた。防護服に血がついている。

岩熊が両手を広げた。

「汚染されてるぞ、俺たち。早く除染してくれ」

菱沼は、オフサイトセンターの隣にある福島県環境医学研究所の建物に６人を連れて行った。

研究所には線量検査や除染のできる設備がある。だが、災害後は停電や断水で使えなくなっていた。

菱沼は１４日朝から、ここを除染所として使えるようにするため、突貫作業を続けていた。

倒れていたロッカーを片付けた。そこに自家発電機を持ち込み、シャワー設備を据えつけた。いずれも中央特殊武器防護隊の装備品だ。

作業のあと、放射線医学総合研究所の専門家と協力して除染の予行演習をやった。３号機で爆発が起きたのは、それを終えた直後だった。

除染所は、原発作業員の除染のために準備した。その最初の利用者が自分の部隊となってしまった。

除染の前に、放医研の専門家が岩熊らの被曝（ひばく）線量を検査した。

「うわっ、これは高い。みなさん６人が固まっていたら危険です。離れて下さい！」

高い被曝量の者同士が近くにいと、互いに高め合ってしまうというのだ。そんなに危なかったのか、と岩熊は思った。

## 第7章 車ごと吹き飛ばされ

3月14日、3号機の爆発に巻き込まれた中央特殊武器防護隊の6人は、被曝（ひばく）をしていた。  
福島県環境医学研究所内のシャワー室でせっけんを泡立て、全身を洗い流す。隣の検査室で、放医研の専門家が線量検査をした。

「まだ落ちていません」

シャワー室に戻ってまた洗う。

「まだですね。もう1回」

また洗う。

「まだです。特に顔のまわりが残っています」

隊長の岩熊真司は結局、8回洗った。

着る服がないので、素肌の上に直接、新しい防護服を着た。

一息ついて見回した。けがをした隊員もいるが、みんなしゃべれる。ほっとした。

「いや、よかった。大丈夫だよな」

岩熊は、爆発の様子を隊員の菱沼和則に伝えた。

——3号機に給水するため、自分は隊員1人と改造パジェロで現地に向かった。ほかの隊員4人が、5トンの給水タンク車2台で続いた。

午前11時ごろ、3号機近くの給水ポンプ横に停車。ドアを開けようとした瞬間、爆発が起きた。

ドーンという低い爆発音とともに爆風で車ごと吹き飛ばされた。

コンクリートの塊がバラバラと激しく降る。車の窓を割り、天井の幌（ほろ）を突き破った。大きい物で長さ30センチはある。灰色の噴煙が舞っていた。

ドアを蹴破って外に出た。線量計が鳴っていた。累積線量が20ミリシーベルトを超えた警報だ。

無線でオフサイトセンターの隊員を呼んだが通じない。

「長くいると被曝する。離脱するぞ」

車を捨て、徒歩で来た道に戻る。あたりには、作業員十数人がよろよろと歩いていた。

キーがついたままの無人トラックが目に入った。作業員を乗せ、許可を取って隊員の運転で走った。

正門でトラックを降りた。外には乗って行ってはいけないと思ったからだ。通りかかった別のトラックの荷台に乗せてもらい、オフサイトセンターにたどり着いた……。

菱沼に語り終えた岩熊は、最後に厳しい口調でいった。

「東電の説明だと、爆発するほど危険じゃなかったはずだ。爆発の危険性を東電は知っていたのかな。知っていてわれわれを行かせたなら問題だよな」



## 第8章 どうなんですか！

3月14日、3号機の爆発に巻き込まれた中央特殊武器防護隊の隊長、岩熊真司は、除染を終えて隣のオフサイトセンターへ向かった。

隊長以下6人のうち1人は背骨にひびが入る重傷で全治1カ月。3人が打撲。被曝量は最も高い隊員で27・4ミリシーベルトと後でわかった。

センターに入るとき、岩熊は入り口で何度も線量を計測された。念入りに8回洗ったが、放射性物質は完全には落ちきっていなかった。

測定担当の職員に防護服を着るように言われた。放射線から岩熊を守るのではなく、岩熊が中に持ち込まないようにするためだった。

広い会議室でコの字に置かれたテーブルの末席に座る。経済産業副大臣で現地対策本部長の池田元久（いけだもとひさ）ら6、7人が座り、会議が始まった。

防護服を着て、足は医療施設の患者用スリッパ。そんな姿は岩熊一人だけだった。

原子力安全・保安院や東京電力の社員が事務的に発言した。爆発については最初に触れる程度で、炉の状況や冷却方法などに話が集中した。

最後に岩熊の順番が回ってきた。

岩熊は化学の研究開発職が長い。スラリとした体形に眼鏡をかけ、一見すると物静かな学者タイプだ。その岩熊が、語気を強めた。

「今回、けがをしたのは私の部下です。爆発は事前に分かっていたのか、処置が悪かったから起きたのか。いったいどうなんですか！」

しーんとした。

だれも答えないまま会議は終わった。

直後に東電の責任者が走ってきて頭を下げた。

「大変なことになってしまい、本当に申し訳ありませんでした」

岩熊らが3号機に向かうことが決まったのはこの日朝だった。

「すぐに水を入れれないといけない状況です。自衛隊さんしかお願いできません」と池田に頼まれた。

出発前、岩熊は東電側に現場の状況を聞いた。詳細は不明、放射線値は高いが、社員が先導する。現場では作業員も働いている、と説明された。それなら爆発の可能性はないだろう。なにより急がなければ、と軽装備の車両で給水に向かった。

のちに明らかとなる東電のテレビ会議記録によると、3号機では13日午後に白いもやが発生していた。先に爆発した1号機と同じ経過だったため、東電は爆発を警戒していた。

そんな重要な情報を、岩熊は伝えられていなかった。





## 第9章 踏みとどまってくれ

3月14日午前の3号機爆発は、隣の2号機にも影響を与えていた。電気回路が壊れ、蒸気を逃がせない。炉内の圧力は上がり、水位は下がった。水位が下がり続けると燃料棒が露出し、メルトダウンに至る。

14日午後4時。陸上自衛隊中央即応集団の副司令官で陸将補の今浦勇紀（いもうらゆうき）（54）が福島第一原発のオフサイトセンターに着く。原発の5キロ南西で、政府の原子力災害現地対策本部がある。いわば現地の司令塔だ。

今浦が着いたころ、2号機の危機が表面化し始めていた。燃料棒が露出する可能性に官邸が気づくのが、ちょうど午後4時だ。

今浦がオフサイトセンターにいたのは、わずか18時間だった。現地対策本部が福島県庁に撤退する翌朝まで、忘れられない一夜となった。

今浦の記録によると、撤退の動きはこうだ。

午後6時45分、現地対策本部長の池田元久の部屋に行った。池田は経済産業副大臣で、2階の個室を執務室にしていた。

池田を上座に、今浦ら幹部が集まってテーブルを囲んだ。メンバーは福島県副知事の内堀雅雄（うちぼりまさお）、原子力安全・保安院審議官の黒木慎一（くろきしんいち）、東京電力常務の小森明生（こもりあきお）。

小森が池田にいった。

「2号機が危ない。メルトダウンを始めたのではないか。4時間後に最悪の状況が起きるかもしれない」

小森の情報を受け、撤退を検討した。移る先に選んだのは原発から60キロ離れた県庁だった。撤退時期は定めず、内堀らの先遣隊が先に行って移転準備を進めることにした。

「20キロ圏内に住民がまだ350人残っているようだ」との報告もあったが、住民避難の検討は立ち消えになった。午後8時、大部屋で全体会議が開かれた。池田が方針を全員に伝え、内堀は県庁に向かった。

15日午前0時半、館内放送。

「線量が上がっています。防護服、防護マスクを着けてください」

隊員が東電社員に聞くと、建物内が毎時700マイクロシーベルト、外は毎時1ミリだった。午前2時、安定ヨウ素剤の服用を指示される。

先遣隊が出発したとき、予定以上に多くの人員がオフサイトセンターからいなくなっていた。

未明の全体会議。池田が「決められた人以外で浮足だってここを出ていった人がいる」と声を上げた。

「まだ離脱を決めたわけじゃない。ここに踏みとどまって仕事するんだ」



## 第10章 犬や猫にあげよう

3月15日の明け方、政府の現地対策本部が置かれた福島第一原発のオフサイトセンター。

陸上自衛隊中央即応集団の副司令官、今浦勇紀は1階の食堂でドーンという爆発音を2度聞いた。続けてドドドと振動で部屋が揺れた。

4号機の爆発だった。



午前6時40分。現地対策本部長、池田元久の部屋に幹部が集まった。

今浦が提案した。「離脱条件とするリストを作りませんか」。現地対策本部をオフサイトセンターから撤退させる、その判断材料を明確にしておこうという趣旨だった。

10分後、東京電力常務、小森明生が走り書きのメモを出した。

(1) 2号機で圧力容器や格納容器の圧力が設計限界を超える。

(2) オフサイトセンター周辺が毎時500マイクロシーベルトを超える。

(3) 2号機が爆発もしくは火災などの非常事態が起きる。

この3条件がそろったら、全員が撤退して福島県庁に移る――。

午前8時35分、「3条件がすべて満たされた」という声があがる。

大部屋の中で池田が大声を張り上げた。

「今から離脱する。県庁へ行く」

オフサイトセンターに詰めていた東電社員や保安院職員がバタバタと動いた。どの車に誰が乗るかは事前に決めていた。今浦は、バンタイプの車の後部座席で池田が敬礼するのを見た。車列が出て行ったのは、今浦の記憶では午前9時ごろだった。

今浦は残った。

食堂には食べさしの缶詰やはしが残されていた。ゴミ袋に入れ、センター内の電気を消して回った。

最後に屋外に段ボールを置いた。中には今浦たち自衛隊員5人の携行用非常食が4日分あった。取り残された犬や猫にあげようと思った。今浦もミニチュアダックスフントの飼い主だ。原発から10キロ圏内に犬や猫がさまようのを見て心が痛んだ。食べ物とわかるよう、すき焼きのパック一つだけ開封しておいた。

午前10時、改造バジエロで隊員4人とオフサイトセンターを出た。

双葉町で、民家から出てきた70歳代の男性に声をかけられた。夫婦で逃げ遅れたといい、一つずつ大きな荷物を抱えている。

今浦は装備品を路肩に下ろして夫婦を乗せ、避難所まで運んだ。

午後4時、福島県庁に着いた。オフサイトセンターに入ってから、ちょうど24時間が過ぎていた。

## 第11章 プロなんだから撃て

政府の現地対策本部が福島県庁に後退した3月15日は、官邸にとっても防衛省にとっても局面が変わった日となった。

この日の早朝、首相の菅直人（かななおと）（66）は東京電力本店に乗り込んで政府・東電の統合対策本部を設けた。

このころ、米国は日本に「東電任せにせず、自衛隊を使うなど国をあげた対処を」と迫っていた。

陸上自衛隊中央即応集団に所属する「影の部隊」が原発対処の主力になる。

即応集団傘下の第1ヘリコプター団は16日、3号機への放水を試みて断念。翌17日午前に成功させる。

17日は同時に、地上からの放水も進められた。



菅はこの日、東京都知事の石原慎太郎（いしはらしんたろう）（８０）に東京消防庁の原発への派遣を要請した。警視庁機動隊は、高圧放水車で原発に向かった。

自衛隊でこの任務を担ったのは中央特殊武器防護隊。指揮は２佐の菱沼和則だ。

自衛隊消防車が１１台、全国から福島に集まった。菱沼はそこから放水距離の長い５台を選んだ。

１７日夕、化学防護車が付き添いＪヴィレッジを出発した。空気浄化装置付きで汚染地域も自由に動ける。

車窓から見る街並みは、明かりも人の気配もない。菱沼は１９９５年の地下鉄サリン事件を思い出した。化学防護衣を着て日比谷線の小伝馬町駅に出勤し、ホームや車両に除染剤をまいてブラシでこすった。

あの時の静けさがよみがえってきた。不思議と冷静になった。

夜。第一原発に着き、正門近くの詰め所に入る。白い防護服の左胸に名字を書いた東電社員が３人いた。

経路を聞くと、「がれきだらけでどこも通れません」。

３号機の１００メートル手前の高台で待機し、１台ずつ３号機の目の前まで近づいて放水することにした。放水時は消防車の両脇で化学防護車２台が盾となって放射線を防ぐ。

消防車に乗るのは、自衛隊航空機の消火にあたる陸海空の隊員たち。菱沼は詰め所で伝えた。

「３号炉の上に間違いなく穴が開いている。あなた方は消防のプロなんだから、そこに撃ってくれ」

午後７時３５分、消防車のノズルが建屋に向かって上がった。化学防護車の拡声機が声を出す。「撃て」

隊員は蒸気が上がるのを見た。

「下がれ」。午後８時９分、最後の５台目が終了した。放水量は計３５トンだった。



## 第12章 代わってもいいのか

消防車、重機、輸送車両……。3月18日の福島第一原発の敷地は警察、消防、自衛隊、東京電力の車や人がひしめいて混乱していた。

前日、自衛隊と警察が3号機に向けて地上からの放水を行っていた。使ったのは高压放水車だ。原発を抑えるため、さまざまな組織が数多くの車両、機械を集合させていた。

各組織を統括する立場の者はいなかった。

懸念した官邸はこの日、指示書を出した。

「自衛隊が全体の指揮をとる」

海外も含め災害派遣の実績があることが大きな理由だった。

現地調整所長を務めることになったのは、中央即応集団の副司令官で陸将補、田浦正人（たうらまさと）（51）だった。このあと5日間隔で、同じ副司令官の今浦勇紀らと交代しながら現地を束ねることになる。

田浦にはイラクやハイチ地震で現場指揮の経験があった。

まず全体会議を開いた。

各組織のトップを前に、田浦はあえて下座に着いた。自衛隊が先導する姿勢では、うまくいかない。

「私が調整役になりました」

裏方に徹する意思をあいさつに込め、笑顔を見せた。

試される時はすぐにきた。

午後10時すぎ。東京消防庁が任された3号機への放水が予定より約5時間遅れていた。大量のがれきが消防車の進路を阻んでいたからだ。

東京消防庁の消防隊長が苦渋の表情で受話器を耳に当てていた。

相手方は原子力災害対策本部だった。電話の主はこう怒鳴っていた。

「何している！ これ以上もたつくな自衛隊にやらせろ」

田浦が電話を代わった。本部側も自衛隊員に代わった。

「本当に自衛隊と交代しろと言っているのか」

「はい。やれ、と言っています」

現場を本部は理解していない。言う通りにすれば、東京消防庁の士気は下がるだろう。電話の向こうの隊員に、田浦は説明した。

「敷地の道はがれきだらけで、車はすれ違えない。迂回（うかい）路もない。自衛隊が準備して放水するまで3時間は必要だ。しかも消防庁の放水量は自衛隊より多い。それでも代わっていいのか、聞いてくれ」

本部は指示を取り下げた。

東京消防庁の放水は19日未明に成功する。一報を聞いて田浦が消防隊長と握手をしたとき、その目には涙がたまっていた。



## 第13章 行けと言って下さい

中央即応集団の副司令官、田浦正人は、地上放水を担う自衛隊員の心中が気になっていた。

自衛隊の消防隊は、陸・海・空の自衛隊から集められた急造部隊だ。ほぼ全員が、この任務で初めて顔を合わせた。会話も少ない。

心身に負担がたまっているように見えた。急造ゆえの連帯感の薄さも気がかりだった。

2011年3月19日、原発対処の前線拠点となっているJヴィレッジの一室。隊員を集め、円陣を組むように座らせた。

「ここに来たいきさつや、胸の内を聞かせてくれ」

田浦は呼びかけると、メモをとるためにノートを広げた。

そのときのノートには、ミーティングの様子がこう記されている。

隊員のひとりが話し始めた。

「行ってほしくない」と、妻は原発への派遣に怒った。

妻を説得した。

「行かせてくれ。行かなかったら一生後悔するし、他の人が行くことになる」

別の隊員が口を開いた。

「出身は宮城県。仙台にいる親戚が亡くなった。被災者の役に立てるなら、と希望してきた」

定年間際の海上自衛隊員はこう言った。

「若い者には将来がある。ここは年寄りの出番だなということでやってきた。湾岸戦争のあと、先輩たちはそう言って向かったので……」

ある隊員は、上官にあたる班長に申し出た内容を明かした。

「独身者の自分たちが行きます。新婚の班長は残ってください。なんかあったら、奥さんに合わせる顔がありません、と」

派遣の選考で、もめた駐屯地もあった。

「独身は行くな」と家族持ちの隊員。独身者は「家族持ちこそ守る人がいる。行っちゃいけない」。

別の隊員が訴えた。「希望をとるのではなく、行けと言って下さい。行くに決まってるんですから」

任務への思いも次々と出た。

「消防車で運べる水10トンは、3分弱で放水しきってしまう。もっと大量にかけてやりたかった」

「防護服、ゴーグル、鉛のベスト。暑さと重さで体力を消耗した。3号機を目の前に、ことの重大さがわかった。理由はわからないが、涙が出てきた」

田浦は口を挟まず、じっとメモを取り続けた。



## 第14章 俺が見てくる

「今日中に4号機に、地上から放水しろ」

2011年3月19日夕。

中央即応集団の副司令官、田浦正人は、政府の原子力災害対策本部から緊急の指示を受けた。

12日に1号機、14日に3号機、15日に4号機の各建屋が次々に爆発した。2号機も異常が発生し、大量の放射性物質が吐き出されていた。

特に4号機のプールには大量の核燃料が貯蔵されている。冷却が滞れば影響が大きいとみられていた。

3号機へのヘリ放水を皮切りに原子炉の冷却作業は始まった。だが、4号機への放水は初めてだった。

放水場所は確保できるか、がれきはどれほど散乱しているか。

東京消防庁が前夜、3号機の放水にのぞんだとき、がれき処理などに6時間以上かかっていた。

田浦は、「了解しました」とは即答できなかった。

ミーティングで心のうちを語り合った航空自衛隊のベテラン消防隊員に助言を求めた。

「今から、やれるか？」

隊員は、率直に打ち明けた。

「自信はないです」

その後で付け加えた。

「爆発など最悪の事態を考えて、消防車を反転して引き返す場所さえ確保できれば、やれます」

このやりとりの間にも、本部は何度も「いつ放水するのか」と催促してきた。

出動の可否を決めるには、現場の確認が欠かせない。

「俺が見てくる」と田浦は部下に告げた。「危ないです。ここにいてください」と反対する部下を振り切って改造パジェロに乗り、20キロ先の原発を目指した。

真っ暗闇。ヘッドライトの明かりに、鉄骨むきだしの4号機が浮かんた。辺りは、爆発で吹き飛んだがれきで覆れていた。



田浦は本部に電話をかけた。

「朝になってがれきをどけ、放水場所や、万が一の退避場所を確保してから実施します。今夜はできません」

本部は了承した。放水は翌20日の午前8時すぎから始まった。

そのころ、原発から30キロ以遠は安全だとされているのに、30～50キロ北西にある飯館村周辺の放射線量が高いことがわかってきた。

住民が戸惑いながら住み続けるその村に、緊急時の住民救出という特命を受けた第1空挺（くうてい）団がいた。

## 第15章 住民は普段着のまま

空からパラシュートで降りて、敵を強襲する――。

自衛隊でただ一つの落下傘部隊、中央即応集団に属する第1空挺（くうてい）団（約1700人）に、住民救出の命令が下った。





震災6日目の3月16日のことだ。

福島第一原発20～30キロ圏内の住民には屋内退避指示が出ていた。任務は、原発に大きな異変が生じた際は、介助が必要な住民などを迅速に助け出せ、との内容だった。

空挺団長の陸将補、山之上哲郎（やまのうえてつろう）（52）は、自力で逃げられない高齢者など要救助者のリスト作りに取りかかった。

「ひとりも残すことなく、救い出せるようにしろ」

指示を受け、隊員たちが動いた。

病状、要介護度、介護者の同行の可否……。住民の詳しい情報をつかもうと、自治体に問い合わせたが、うまくいかない。

一軒一軒を訪ねて、聞き取るしかなかった。

空挺団で大隊長を務める2佐、赤羽敏夫（あかばねとしお）（54）は、原発から北西40キロの飯舘村（いいたてむら）に拠点を置いた。

部下約400人を5人ずつの班に分け、まず南相馬市内を調べて回った。

ジャンパー姿の高齢の女性が、道ばたを歩いていた。赤羽は深緑色の四輪駆動車から降り、柔らかな口調を心がけて、女性に話しかけた。

「こんにちは」

「自衛隊さん？」

「そうですよ」

「外に出ちゃいけないって指示があるんだけど、困っちゃうよね」

状況をたずねたい赤羽に、女性は逆にどんどん質問してきた。

「自衛隊さんは、なんでそんな格好なの？ このあたりは、そんなに危ないの？」

赤羽たちは、放射性物質の付着と体内への吸入を抑えるため、白い防護服とマスクを身につけていた。

「そんなことはないですよ、大丈夫ですよ」

不安をあおらないよう答えるのがやっとだった。それにしても、説得力のない言葉だと思った。

俺たち自衛隊が防護服を着て、救うべき住民は普段着のまま。

逆じゃないか――。

住民との会話もかみあわない。これではリストを作るところか、不審をぬぐうための説明に時間を割かなければいけない。

どうする？ 赤羽は焦った。

## 第16章 防護服やめましょう

「これって、異様な光景だと思いませんか」

震災から1週間がすぎた3月19日。福島第一原発から20～30キロ圏の福島県南相馬市。

第1空挺(くうてい)団大隊長の2佐、赤羽敏夫は、現地視察にきた空挺団長の山之上哲郎を案内しながら訴えた。

空挺団は原発の悪化に備え、自力で避難できない20～30キロ圏の要救助者リストや、避難計画の作成にあたっていた。

山之上を伴い、赤羽はいつもと同じように民家を訪ねて回った。

白い防護服を着た隊員とは対照的に、応じる住民は普段着のまま。物々しい格好に動揺し、率直に聞き取りに回答してくれない。その繰り返しだった。

部下からも「ここは危険なのかと説明を求められ、話が進まない」との報告が上がっていた。

赤羽は、山之上に具申した。

「防護服の着用をやめてもいいでしょうか」

放射性物質の体への付着を抑えるため、原則着用となっていた。

山之上は考えた。

確かに、救うべき住民と、自分たちの姿には差がある。壁をつくっているかもしれない。原発の状況はいつ悪化するかもせず、避難時の準備は急務だ。

「そうだな。着用をやめよう」

山之上は、その場で決めた。ただし、防護服は万が一に備えて持ち歩くこととした。

防護服を脱いだことで聞き取りははかどった。

だが一軒一軒を訪ねるのは手間が多く、特に留守の場合は時間がかかった。

避難所に移ったのか、外出したのか、寝たきりで応答できないのか。電気メーターや郵便受けなどを手がかりに何度も足を運んだ。次第に、隊員が放射能の影響を心配するようになった。そうした声を聞き、赤羽は放射線管理に詳しい幹部を呼んで講習会を開いた。

隊員は不安を続々と吐き出した。

「俺の精子に異常ないですか？」

「雨の日の影響は？」

幹部が答える。

「今の状況なら基本的に精子に影響はない。雨の日ではできるなら屋内にいたほうがいい」

隊員の表情が和らいだ。

空挺団は20日以降、原発を中心に北、西、南の三つに分かれ、確認作業を続けた。約400人の要救助者リストができた。



## 第17章 特攻もあるのか

震災から2週間がすぎたころだった。

夕方、第1空挺（くうてい）団が拠点の一つを置いた飯舘村のスポーツ公園に、村人の高橋喜一（たかはしきいち）（63）がふらりと訪れた。空挺団は最悪の事態を想定して、20～30キロ圏にいる住民の避難計画をすすめていた。



「これ、みんなから」

自衛隊員に甘酒と豚肉10キロを差し出し、ぶつきらぼうに言った。

「あんたらが仰々しい格好で来たとき、ここは危ないのかとみんな怖がってたんだ。けど今は、避難することになっても大丈夫だって落ち着いてる」

村のほとんどは30キロ圏外に位置しているが、隊員たちは村内の民家も訪ねて回っていた。

高橋も訪問を受けていた。空挺団の目的は次第に理解されていった。

陸上幕僚長の火箱芳文から空挺団長の山之上哲郎に指示が下りたのは、そんなときだった。

「すぐに拠点を移せ。飯館周辺は放射線量が高い」

村の3月末の放射線量は毎時10マイクロシーベルト前後。局所的に線量の高いホットスポットになっていた。

山之上は、スポーツ公園の拠点を束ねる空挺団大隊長の赤羽敏夫に相談した。

「残るべきです」と赤羽は強く言った。避難態勢も整い始めたばかり。即時撤退すれば、いらない不安を村民に与える。

一方で山之上は、火箱が理由に挙げた「いざという時に部隊が使えなくなる」ことの重みも受け止めていた。山之上は火箱に電話をかけた。

「状況を見て、移ります。時間を下さい」。火箱は「そうか、わかった」とだけ答えた。

3月29日。火箱が拠点到視察に来た。村からの撤退理由が山之上、赤羽に説明された。

「隊員の被曝（ひばく）量を気にしているのは、原発周辺で最後の最後まで任務についてもらうためだ」

さらに、火箱の中で収めている考えも明かされた。

「隊員には空から原発に向かって降下しながら、核分裂を抑えるためのホウ酸をまいてもらうことだって、今後あるかもしれないんだ」

赤羽は息をのんだ。まさか。特攻もあるということか――。

火箱が去ったあと、山之上と赤羽は放射線管理の徹底を決めた。

4月5日、飯館村を離れ、原発から北約30キロの南相馬市鹿島区に拠点を移した。

## 第18章 任務続行か、中断か

「影の部隊」である中央即応集団とは別に、原発周辺に配置された部隊がある。

震災翌日に群馬県から臨時派遣された第12旅団だ。陸将補の堀口英利（ほりぐちひでとし）（56）が旅団長を務め、被災者支援にあたっていた。

3月14日午前11時、3号機の建屋が爆発した。政府は20キロ圏内に避難指示を出していたが、多くの住民は逃げられずにいた。病院や高齢者施設に取り残された人たちがいる、との情報も入っていた。

12旅団が拠点とする福島郡山駐屯地の司令部に、助けを求める声が殺到した。堀口は指示を飛ばした。

「患者を搬送しろ」

「燃料や水を運べ」

約2千人の隊員が、ひとつひとつに伝えていく。

夜になっても、要請は次々と舞い込む。隊員らは現場を走り回った。

堀口は、司令部の作戦台に広げた福島の地図を傍らに、作業内容や注意点などをメモしていく。「やるしかない」と自らを鼓舞した。





隊員の一人が、堀口を呼んだ。

「即応集団の副司令官から、電話です」

受話器を取るなり、副司令官は早口で告げた。

「９０分後、メルトダウンする可能性がある」

「……メルトダウン」。副司令官の言葉を繰り返した。本当なのか――。

電話を切った堀口は、その内容を周囲に伝えず、黙り込んだ。

左手の腕時計を見る。午後８時５０分すぎ。午後１０時２０分が、緊急事態が起きるときだ。

テレビのニュースでは、２号機が炉心溶融か、とも報じていた。

最悪の事態が頭をよぎった。チェルノブイリ原発事故では、制御不能になった原子炉が爆発し、大量の放射性物質がまき散らされた。

任務続行か。中断か。

判断を迫られていた。

目の前の地図をもう一度見た。

停電が続く原発３０キロ圏内では、大勢の隊員が給水や患者搬送、行方不明者の捜索に奔走している。

現場の隊員らへの連絡、県民の退避にかかる時間を考えれば、午後９時がタイムリミットだ。

極度の緊張で、胃がせり上がるようだ。考えも交錯する。

「決心しなきゃいけない。福島県は、俺が担当している」。通信担当の隊員を呼び、命令を出した。

「MOP P 4（モップフォー）を発令する！」

## 第19章 サリン以来の発令

自衛隊には攻撃に対する4段階の防護レベルがある。最上級が「MOPP4（モップフォー）」だ。持ちうる最大限の装備で危険に備えろ、という意味だ。

3月14日午後9時すぎ、福島郡山駐屯地。被災者支援にあたる第12旅団長で陸将補の堀口英利は、それを命じた。

迷彩服の上に厚手の防護服を重ねる。ブーツの上に、さらにブーツ。防護マスクをかぶり、隊員らは慌ただしく装備を身につけていった。



福島第一原発事故の対処にあたる中央即応集団から、午後１０時２０分にメルトダウンの可能性があると告げられていた。

堀口は、同時に命じた。

「隊員は被災者支援をすぐに中断し、屋内に退避せよ。住民にも屋内退避を呼びかけろ」

放射能を少しでも防ぐため、自ら司令部の窓やドアを閉めて回った。

午後１０時２０分になった。

なにも起きない。なぜだ――。

情報の真偽を確かめるため、原子力安全・保安院の課長に何度も連絡をとろうとした。

１時間後、電話がつながった。防護服で動き回り汗だくだったが、受話器の向こうに緊迫感はなかった。

「メルトダウンを発表した事実はない。原発の状況は好転している」

「本当なのか！ そんなはずはない。確認して連絡をくれ」

怒鳴って受話器を置いた。

３０分後、課長から電話がきた。メルトダウンの危険はあったものの回避された、との説明だった。

発令から３時間後の１５日午前０時１５分、ＭＯＰＰ４を解除した。

だが実は、事態は説明よりも深刻だった。

２号機では格納容器の圧力が異常上昇し、爆発してもおかしくなかった。東電社長の清水正孝は原発からの撤退を官邸に申し出ていた。

原発が最も危機に陥った１４日夜から１５日未明。これらを含め詳しい情報が、堀口に入ることはなかった。

支援活動はすぐに再開したが、中断による影響が出ていた。

怒りの電話が司令部に入った。郡山市長だった。

「急に給水支援を止められ、市民が困っている。何をしているんだ」

堀口は、市長に納得してもらえるように経緯を細かく伝えた。

１９９５年の地下鉄サリン事件以来、自衛隊史で２度目のＭＯＰＰ４。混乱の中、一般に知られないまま発令されていた。

あの日を思い出させる震度6弱の強い揺れが、福島県を襲った。

震災からちょうど1カ月後、2011年4月11日の夕方だった。

「影の部隊」、中央即応集団が原発対処の最前線とする福島県楢葉町のJヴィレッジ。

現地指揮官を務めていた即応集団の副司令官で陸将補、田浦正人は思った。今回こそ出動になる――。

「消防部隊は、すぐに準備しろ」

いつもより声を張り上げた。

原発を冷却する自衛隊の放水活動は、コンクリートポンプ車による大量注水が始まったことで、3月末から行われていない。余震がある度に隊員を消防車に待機させたが、出動には至らずにすんできた。

田浦は、Jヴィレッジにいる連絡役の若い東電社員に声をかけた。

「自衛隊による放水はいつでもいける。原発は大丈夫か？」

「私も、何もわからないんです」

このとき、福島第一原発の1～3号機では冷却用の仮設ポンプが止まり、原子炉への注水作業が中断されていた。しかし、田浦に連絡はなかった。

待機が続いた。

1時間後、ようやく東電から状況が報告された。「注水は再開され、その他は異常なし」

対処が終わったあとだった。

この間に何か起きていたら、どうするつもりだったのか.....。

田浦は、原子炉の圧力を下げるベントをめぐる3月下旬の一件を思い出した。

東電がベントしないと説明した後、行われたとの情報が流れた。ベントすれば放射能が漏れ、放水する隊員に危険が及ぶ。結局、行われていなかったが、本店になかなか確認が取れず、現場は混乱した。

震災から1カ月たっても、危機対応はなっていなかった。

田浦は後日、東電幹部に要請した。「危機の時の指揮命令系統をしっかりと構築してください」

しかし、東電からは幹部の携帯電話一覧表が送られてきただけだった。

このころ、即応集団に属する中央即応連隊は、原発が危機に陥ったとき、現場で作業する東電社員らを救う作戦を極秘で進めていた。

この態勢では不確かな情報の中で動かざるをえなくなる。東電の現場指揮官に会おう。

4月21日、田浦は福島第一原発の所長、吉田昌郎（よしだまさお）（57）を訪ねた。



## 第21章 吉田所長は泣いた

「本当に申し訳なかった」

初対面でいきなり、深々と頭を下げられた。

2011年4月21日、福島第一原発の免震重要棟。

Jヴィレッジで前線指揮をとる中央即応集団の副司令官で陸将補、田浦正人は所長の吉田昌郎を訪れた。吉田は、ずっとこの棟で原発収束にあたっている。やつれていた。

田浦は、東京電力との緊急時の連携について話すつもりだった。

4月11日に震度6弱の地震が起きたとき、東電と連携が取れなかったことが危機感となっていた。

謝罪の真意を測りかねていると、吉田は続けた。

「3号機爆発の事です。温度が上がっていたが、危ないとは思わず自衛隊に給水をお願いした。あんなことになり、申し訳ない」

3月14日午前、中央特殊武器防護隊が爆発に巻き込まれた。吉田は、抗議にきたと思っていた。

そうではないことを説明した上で、田浦は提案した。

「非常時には直接、連絡を取りませんか。原発で作業するみなさんを救う準備も自衛隊はしています」

救出作戦は極秘のため詳しく話せない。トップとして踏ん張っている吉田に、ぎりぎりの言葉で伝えた。

「.....そこまで考えてくれていたとは」。吉田は泣いた。

10分ほどの面会だったが、緊急時の連絡体制が整った。

このころ防衛省は、官邸から秘密の依頼を受けていた。

原子炉から約1・5キロ離れた高台から各号機を直接配管でつなぐ。原発が冷却できなくなったら、自衛隊がセメントを流して原子炉を固めるとの内容だった。結局、東電がその作業をやることになったが、最悪時のあらゆる想定に自衛隊は動いた。

震災から3カ月がすぎたころ。

原発を包囲するように配置された即応集団は、その任務を解かれ、それぞれの本拠地に戻っていった。

除染や地上放水をした武器防護隊、空中放水したヘリ団、前線拠点に派遣された副司令官ら、住民避難に備えた空挺(くうてい)団.....。

6月10日。東電社員らの救出作戦に備えた中央即応連隊も、栃木県の宇都宮駐屯地に帰った。

連隊幹部は真っ先に秘匿の作戦資料を取り出すと、シュレッダーにかけた。





プロメテウスの罠〔24〕 「影」が動いた「早く除染してくれ！」

著 者 朝日新聞（野上英文、板橋洋佳）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年2月22日 WEB新書版発行

2013年11月30日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-002-1

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年2月22日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。